

発行 新潟日報社
新潟日報社 上越支社
業務部 TEL025(523)9700
FAX025(523)9736
報道部 TEL025(523)9725
FAX025(523)9734
〒943-8545
上越市木田1-2-4

新潟日報

2017年(平成29年)

6月14日 水曜日

<6月15日の上越> 日出4:26 日入19:09 月出23:04 月入9:19 月齢20.3 満潮7:36 16:54 干潮0:13 11:50

制作協力
上越ニックサービス
TEL025(523)0293
FAX025(523)0290
新潟日報社 上越支社内

どう考える

上越かわらばん

まちづくり

吉田 昌幸 青森県藤崎町出身。北海道大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。進化経済学会理事。上越市新水族博物館を核とした地域活性化検討会会長。



写真=まちづくりについて話し合っている（左から）吉田昌幸准教授、佐渡文哉さん、岡田拓丸さん=上越教育大

佐渡文哉さん（広島県福山市出身）地域課題に子どもが主体となって取り組み、それにより住民も動いていくようなきっかけを作りたい。子どもと一緒に学んでいきたい。

どんな先生に？

岡田拓丸さん（石川県七尾市出身）子どもたちが主張的に動ける学級作りを目指したい。教師が一緒に参加することで子どもと大人の関係も変わるのでないかと思う。

駅が消えると町が消えたような感覚になる。駅や鉄道は地域にとって重要なのはどと考えています。

吉田 駅周辺や中心市街地だけでなく、郊外でも空き家が増え「空き地化」している。そういう中でどうまちづくりをしたいのか。人口が減っているから交流人口を増やそうという取り組みが全国的に行われているけれど、一方で、地域

協力隊は助つ人 主役は地域

駅が消えると町が消えたとなるのか、試行錯誤しながらはならないね。地域の人には、外部からの人が一緒になって、どうしたらハッピーな地域に

日常的には電車に乗らない人たちは、企業などが自分たちの鉄道としてどう関わっていくのか。鉄道を核にしてどんなまちづくりしていくのか、考へないといけない。

■課題発見

調査、研究することによっては、これまでと違う観点でその地域に光を当てるという意義がある。地域の人が持っているたくさんの情報に意味付け、価値付けるのは研究者の役割だ。地域にはこんな資源がある、こう生かせば地域が良くなると提言できればメリットは大きい。上越教育大のよ

うな規模の大学はむしろ、そういうことを積極的にやっていかないといけないと

知りたい 聞きたい

(9)

上越教育大連携企画

人口減少などで地方都市の衰退が心配されています。まちを元気にしていくために、地域に根差した大学や研究者が果たす役割も注目されます。まちづくりをテーマに修士論文に取り組んでいる大学院社会系教育実践コース2年生の佐渡文哉さん（23）、岡田拓丸さん（23）、地域経済やまちづくりが専門の吉田昌幸准教授（40）に話してもらいました。（以下敬称略）

吉田 2人はこれから修士論文に向けた調査に入るんだよね。

吉田 私は地域おこし協力隊をテーマにしています。母校の小学校を訪れたときに児童数が少なく驚きました。知らないうちに町に元気がなくなっている。元気にするにはどうしたらいいのか、考へるようになつたことがきっかけです。

吉田 私は地域鐵道を取り上げます。学部の頃にいた鳥取県には若狭鐵道があり、観光誘致で成功している事例として注目されています。鐵道と地域、企業の関わりなどに 관심を持っています。地図上から

吉田 地域の人と外部の人と一緒にになって、どうしたらハッピーな地域にならんかといふのが難しいです。吉田 そこは仕方ないで、ほかの交通機関の連携を考える必要がある。例えば、直江津駅から上越市の水族博物館まで歩くと15～20分かかるでしょう。実際に9割くらいの人が水族館へ車

の車が周遊していて、そこでもコンパクトなまちづくりを進めた結果、みんなが電車を使えるようになつた。新潟の場合は直線で、周遊する路線がないことだ。

■意味付け

吉田 研究や調査を進めただと思います。そこに暮らす人たちが自分たち自身の問題として地域課題をとらえることが大事ではないかと。吉田 地域の人と外部の人が一緒になって、どうしたらハッピーな地域に

のたちは、外部から来て

いるかというと、そこに明瞭にしていくことが

一番重要だ。問題を見つける能力を研ぎ澄ますことだ。